圖解

量地指南後編

ム1
5275
4

戸川藏書

門 ヘ1
號5275
卷 4

畳地指南後篇序

嗚乎天地之道尚遠而古功
箕數亦功之所由起也故古聖
人列之六藝豈可忽之乎勢
南源昌弘為人惇厚乎才敏
捷銳意箕數焦思研窮之

早稲田大學圖書館
昭和27.6.4受
藏書

力一旦豁然相悉妙矣於是
著量地說三篇曰步世又
化後篇藏諸帳中未示人而卒
其孫定興一日奉書踵余門
再拜曰爲人子者不隕家業之
爲大矣故續之上梓請子
以文冠其首乃受觀其書

捜討擂摭積累約隱縮之
地乎不可纖悉無遺宛然如示諸
掌上洎等數之至大而昌
弘之勤也何異不與人共富蓋
亦云而朽昌弘固可告也故羅

络註氏之異同剔決而澤雪
中非夫貪常嗜瑣者之屬
於有驚目窺其奧旁及是
六株一隅皆馳爭此則甲
傷乙昌孔昌孔既悟術而
疾既學業而隊可謂不

幸矣而其孫續之以數
同志余以嫻厲且嘉雪
勤曰序之以繫于篇
于時寛政丁巳七月上浣
武陵九山久敬叙

西河永忠成書

皇地指南後篇

凡例

柳辛齋著小學全書八冠多の年
あるもの輿地圖說。吾邦ノ儒者ノ初稿ニ係
ルもの。其ノ人二三ノ論ヲ
ゐるのそ。他の著書ニ
二人ずつ。然て村井昌弘ヲ
人の說ヲ引ク。其ノ世人ノ名ヲ
こと引ク者ハ。辛齋ノ
ヤもこと。辛齋ノ
摩ニ。予又弱冠
ども。公務ノ餘力

紙ども墓表の葉ども傷て響
号如抔角尋常三尺を定作し。又後幕を
冊を積して。男墓と言ふ。吾邦ハ昌言を
保て。両後幕となすことを

一

術和棚ハ抔の条が遥なる処の規矩全書。二三の門人
互ふ己が意を加へて。或ハ規矩元法記と
名け。或ハ句股大元集と号し。又地理全書と称し
紛ども皆に之術名十有餘
国益子家ふるる処の規矩全書の術則を掲もの。其
俗同命三四条の傷ハ大元全書等仮開入按
異なる補ひ繁さハ抔ずして。贅言部俚と厭べき
論ずるに量地抔角後巻ふことを記して紙ハ末書

一

あく先傷ハ本抔号地術ふ
ことかりくしび。学ハ者ふ信ず
過半世ふ学地の術等抔て。学ぶ人ハ
人も又然り。況ハ抔てふ
ごとくいくでも。ばふ其の簡
をび。或ハ抔ふとふ者ふ
る者ふ。触手器械の用
とふくでも。故ふ生道の半ハ
の業も多し。況ふ連懸ふ
考ふ其和ふ記ふ通を
九町見を験のたハ。前編ふ
号ふ量地術ふ盈針術。渾発術。機捷術なる

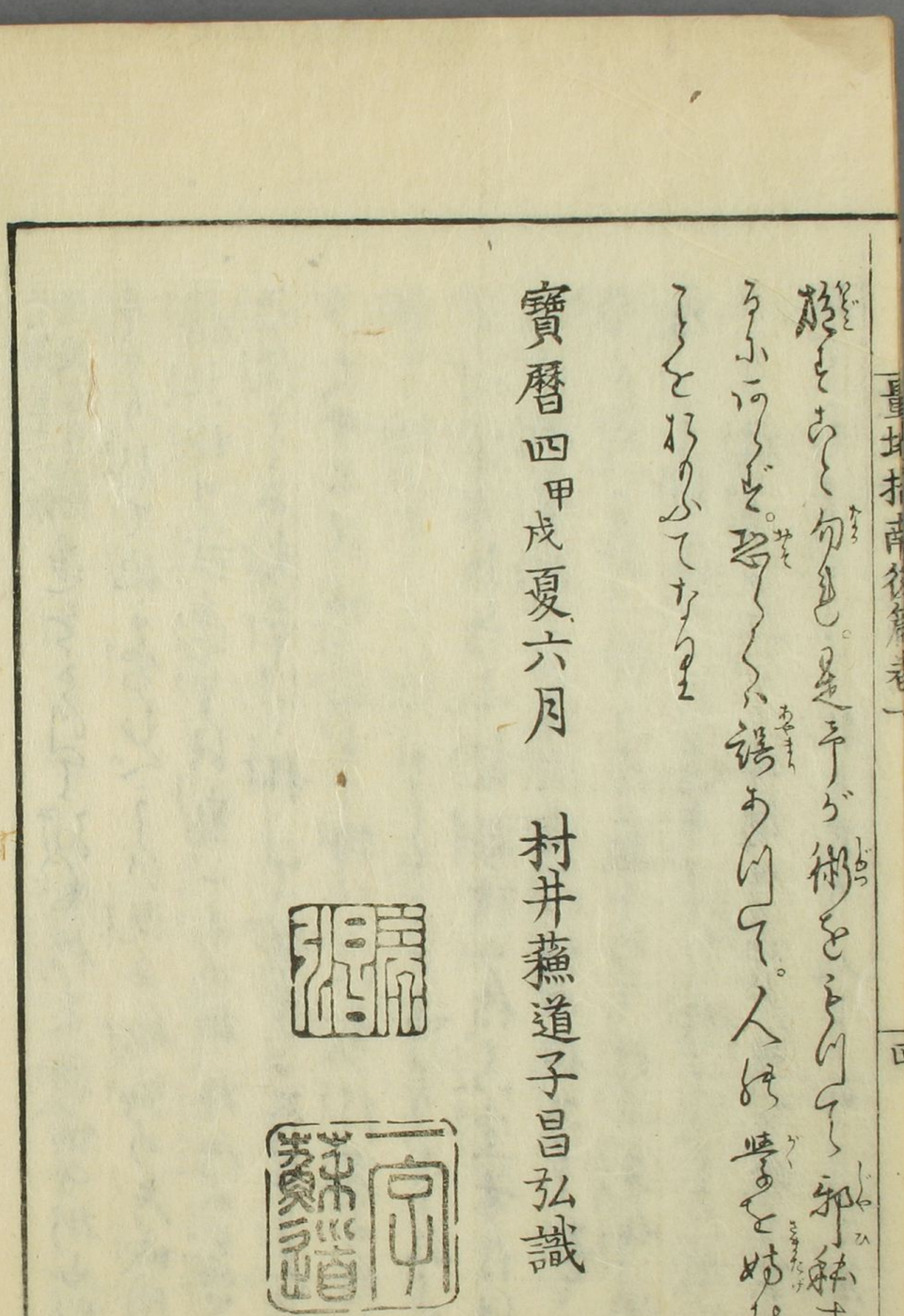
紙ともに渾然として實測と
成ざる算術なり。然れども迂遠の事の
多し。機捷術いえども其數を
故ある要ところまで
止る。其他いまだ其蘊奥を
算數術を學ばずして
高下。汚深をあやまる
學ぶべからず。都て算
ばず。是ふようなる
術のみ有ところなり。

あらざるなり。修多羅股弦の術。三四五の矩を
おとるなり。算家地家
妄なること多し。且數
事ありて法理の根本を
近度數高低淺深
ざるがごとし。諺ふ
家父昌利ぶ云。
み。中一而伺業云々并數都中稿四
選ぶべき筆の筆を
術ふ乖ざる
拘りて迂遠

をふ者。皆かくのごとくなるべし。是又一事一変ふる事にして。近年世間の流行となり。興地の書を綴りて。学ぶ輩を惑むこと尽くをいふべからず。又鳴呼の体たらくを観るに。旦那藏の制度を用んと欲するものの多く。かくのごとくなるべし。是乃学ぶ者の心得違ひにして。其事に不案内にして。其事に不慣にして。仍て今試に主伝を仮りて。大畧を示す。

一　畳地指南前後篇御名。總て一百九十三條

前編五十八條
後編百卅五條　是をもつて。其本興地の術を学ぶ。抜て他を雪むべからず。既に船路の考城図の傳。北極の試遠望鏡の諸流をも。大畧して。移して秘するに不及。学ぶ輩の部。秘して拘ひ。学ぶ輩の用あらんことを望むなり。此書を著すに。説極精の傳。流儀通達の傳掌を指すが如く。詳に説。理測量術の傳。流儀通達の傳掌を指すが如く。詳に説。極精の傳。是偏に御難を解ほぐすの底蘊をもつて。傳ふる所の道をもつて。授るものなり。国風の弊あるを仮ざんで。御を好むもの人々ぶつて。教を



寶暦四甲戌夏六月　村井藾道子昌弘識

量地指南後篇稿之總目次

卷之一雜品解　術名二十一條

規矩全書上卷術名

規矩全書下卷術名

別卷術名異

算法用捨

分棊發法

盤繩用法

已尺之用

舊器之號

規矩全書中卷術名

同流三四書之術名

一本術名異

現差用捨

見盤大成

不拘器物

圖寫之用

新器之號

寸尺用捨

凡例定格

盤切用法

寸尺之用

收器之用

卷之二器用解　術名二十六條

磁石功要並見込様

指針塵

隱針塵

順逆振様

高下振様　振分　隠銘　逆磁石　忍磁石　立覧器
小丸之用　中丸之用　大丸之用　並方維圓盤
元器之用　分度之用　渾発之用
方尺之用　並試定木　折紙之用　隨川器之用
虎法器之用　圖寫器之用　間竿之用
間紙之用
卷之三極傳解　術名二十七條
夜中間町　舩路器械
遠里之考　並遠里之考四術　並舩路之考
真矩之縄二術　地形高低三術　北極之考
土手陰知木高二術　極中不中片極
向指真矩二術　自脇指真矩　高指何分
天守櫓知居所

用山表裏　寫山形　責山形
求山斜登　知山厚
卷之四筭勘術　術名二十九條
筭勘之辨　器械之制　町見術名
四町見之辨　竝平町見　上町見　下町見　向町見
廣遠町見二術　乱面町見　知遠近
知廣狹遠近　並扇矩　知山廣程　并直立
知物高　並別術　量井深二術
知谷深
知水深二術　折竹術三術
量行程　量面高下
卷之五渾發術　術名三十二條
渾発功用　筭理渾発　並三四五之矩　圓理二術

徑矢弦二術　坪詰　歩詰二術　錐形
平面遠近　斜面遠近　正面廣狹
斜面廣狹　摸望之間町　知諸高下
極諸高下　天口　天口異
地口異　覓先　覓跡　草結
水月　樣脚　樣体　白浪
猥獲　開扇　方鏡

總計五卷術名百三十五條

量地指南後編稿之總目次終

量地指南後篇卷之一

勢南　處士　村井昌弘編述

雜品解

一規矩全書上卷術名

前傳　本傳

○空眼　註精眼法　○分數　註開地　○度量　註定目的　○見込　註眩視法
○平町　註左右正開方　○両斜進退　註左右斜開方　○前後進退　註前後當開
○不動知遠　註規矩大元方　○隔沼河　註正當両開方　○極中不中　註一知雙開方　○算法用捨　註雜品解　○三四五矩　註渾開方　○寸尺用捨　註雜品解　○直極　註居量盤　○知山高　註谷心量高方　○知谷深　註量深二術方　○知

両山差 註両山月知方 ○知谷幅木丈 註明山同知方 ○知地形高下 註極傳解
○指望之間 註無的定間方 ○間竿打様 註器用解 ○座而地取 註暗指方面方
○直之縄張 註極傳解 ○陰之目的 註二地重開方 ○知前面廣 註正面斜開方
○夜之見様 註極傳解 ○磁石振様 註器用解 ○磁石見様 註器用解 ○城圖 註四知一開方 ○國圖 註極傳解 ○遠里積 註極傳解 ○北極積 註極傳解 ○船路積 註極傳解 ○道具之制 註雑品解

右上巻術名の目録なり。題を以て大畧量地術尽せりといへども。古来其師範たる人謾ㇾ不ㇾ秘奥を傳へんことを恪て。教誨の式ふ前中後の三等をなして。同術を粗精與三回ふ講習也と見へたり。此旨予ふ取用せざる処なりといへども姑く古法乃書面ふ隨て此ふ抄出す。覧者此趣を察せよ

一規矩全書中巻術名 註前後傳別傳ともふ

○平町 註左右正開方 ○前後進退 註前後當開方 ○左右進退 註正面前後方
不動知間數 註規矩大元方 ○大真矩 註神速太盤方 ○凉沼河開 註正當両開方
○極中不中 註一知雙開方 ○中不中庇極 註極傳解 ○寸尺用捨 註雑品解
○算法用捨 註雑品解 ○三四五矩 註渾發術 ○知山之高 註谷四重高方 ○極直 註立盤方 ○進退之山 註量高一術方 ○両山之差 註両山川知方 ○谷底知地幅 註両山同知方 ○指望間町 註無的定間方 ○坐而地取 註開指方面方 ○間竿歩様 註器用解 ○直之縄張 註極傳解 ○陰之目的 註地量開方 ○知

前面廣 註正面斜開方 ○前面要用 註面知一開方 ○夜中見樣 註極傳解 ○模城形 註極傳解 ○摸國郡 註極傳解 ○現差用捨 註雜品解 ○凡例之格 註雜品解 ○目的目積 註先量解 ○分基發法 註雜品解

右中卷術名の目次大畧上卷の標目小同じ。是教諭の法小前後精粗の別ある故なり。敢も予ら取用せざる所ありといへども。暫く古法の目次小隨て前篇小論ぜざるものとて後篇小述べ見る者贅言こゝて訝ることなかれ

一規矩全書下卷術名 極傳 極要もふ

○大九番付 註畧用解 ○方維大圓 註畧用解 ○真磁石 註畧用解 ○忍磁石 註畧用解 ○不拘器物 註雜品解 ○收用器 註雜品解

○舊器号 註雜品解 ○圓知平町 註四初正開方 ○前回進退 註正面前後方 ○真矩繩張 註極傳解 ○真繩真矩 註斜面正開方 ○真矩枝 註極傳解 ○前面一開 註斜面正開方 ○沼河真矩筋違 註正斜兩開方 ○沼河筋違重 註正斜兩開方 ○十二手陰知 木高 註極傳解 ○向指真矩 註極傳解 ○同從脇而指之 註極傳解 ○指高何分 註極傳解 ○山谷一開 註山谷數知方 ○木高 註山谷數知方 ○真沼河 註殘子一開方 ○山上谷底知

右下卷術名の標目も又上卷中卷の術名と同じ物多し。是も講習ふ精粗あるもの。勿論予ら取用せざる所なりといへども。前篇ふ記さゞるものをば。後篇よのづと右ふ云ふ。

一同流三四書之術名異

○用合度知高註極傳解○山用表裏註極傳解○責山同上○寫山形同上○知山厚同上○天守櫓知居所同上○向真中日陰指同上○聚不盡同上○求山登垂

右同流三四書の術名異ハ好事の者の所為ゟて一向取用所なしといふ可し前ニ云る意味なるゆゑ是ニ贅す

一別巻術名異

○寸尺之用註雑品解○已尺之用同上○折紙法註畧用解○見盤大成註雑品解○盤功法同上○盤縦法同上

右別巻術名異ハ往々前巻の標目と同じくして其名異なるゟ是ニ贅す

一本術術名異

○圓理渾発註渾発術○算理渾発同上○歩詰同上○坪詰同上○方錐同上○平錐同上○山形同上○菱形同上○片狭同上○径矢弦同上○渾発之働同上○遠近平町同上○遠近筋違同上○前面廣狭同上○望之間同上○高下同上○極高下同上○天口同上○地口同上○覓先同上○覓跡同上○様脚同上○様体同上○白浪同上○水月同上○草結同上○猥獲同上○開扇同上

○方鏡 同上

右一本術。術名異ハ。規矩全書二三の書の目次ふ隨て是を記す。見者標目の混雑を訝るこなれ

大凡此六件の條目百三十餘 前篇四十六條 後篇八十四條ハ。規矩全書。其外。規矩術同流三四家の書を以て。按量して各均しからざるの也有余そば不芟不足そばこれを補ふ。猶三四書ふ洩るこあるをは不益の目次といへども捨ずして。此後篇五巻中に論ず。是學者をして他の異目にうつりても。畢竟無益の說なるこを知らしめん為なるこ察すべし

寸尺用捨

凡町見術ふおいて。里町反間を量るハ。皆渾発の事ゆえて。寸尺ふ拘るこなし。然ども。寸尺ハ里町反間の基本なれば。敢て捨るふあらざるの謂なり。其理を委くこゝで。曲尺まて量時ハ。厘毛以下不足ふ出來て眼力に及ざるこあり。渾発みて量るこたハ。蛮算なる故み。割餘といふこなし。故み渾発を以て遠近廣狹高低ともふ計り知るこを町見術の常と云さしるも。丈尺長き物を計るふ至ていハ渾発のこ。又迂遠なるまゝて。曲尺を用て量るの速なるまゝ茲を以て此条を掲ぐ

算法用捨

算法用捨とも又寸尺用捨の理ふ同じ。町見の支業に於て算法を用ひずとも害たふ似ざるも算法くさにあらざれば。因て用るふあらざれば捨ざるふ得ず。假令ハ渾発みて遠程一里の開除を求るまゝ。其一里

を三十六ふ割そ〳〵を一町づゝ三十引又残を六町を三百六十間と知る。此内と十間づゝ三十引又残六十間あるを二間ばゝ三十ふ割時ハ一里の三十分一ハ一町十二間ちかきのでゝ知るでも渾発みてハ迂遠なり。算法あそハ三十六町を一町づゝ三十引残を三百六十間を三十ふ除る時ハ即十二間と知る。是に初の一町を加へゝ一町十二間也。ゝくのでゝさ大業速うなる故ふ至極ハ算法捨るべし

現差用捨

現差用捨とつふハ此ふ於て高毫厘の違あるとハ彼ふ至て丈尺の差となるをのなり。又此ふ於て丈尺の違ありてさ彼ふ至て寸分の害となるざる者ありる。是を用捨と云。尤止ゝを得ざれ法なり。其害となるざるをのハ盤面の墨線渾発の量口圖形の摸寫等なり。其害となるをのハ里町及間の増減なり。里町及間ハ假令ハ開餘を求るとれ間數其目印まで。十間一尺ありても。又ハ九間五尺ありても。共ふ十間と用て深害なし。況郡国の圖なとあそハ五十九間六十一間を俱ふ一町ふ用るも其妨なし。然ども止ゝを得ざれとゝあて好ざるとゝいふまで及ざる也。總て細密のゝとあは差を用ひ。踈遠のゝとあ差を捨るをいふ。

凡例定格

古法ふ云。凡例定格とつふハ小差を論ぜざるをいふ。其の詳なることは左ふ記す

糺寸尺則不論厘毫
糺間數則不論寸分

尺不論厘
寸不論毫
遠則捨寸
近則捨分

糺町數則不論丈尺
糺里數則不論反間
糺大里則不論町里

分基發法

古法ふ云分基発法といふハ。今用ゐ間町里の本をいふ
となり。古ふ云。粟以小粒発分分即発寸尺間丈町里
也云云

間　昔ハ六尺五寸　遠則捨丈
　　今ハ六尺ゐ　近則捨尺
町　六十間ゐ古法三千六百歩を以て田畑の一町の　遠則捨反
　　積となし其外面を用ゐ今ハ三十六丁を　近則捨間
　　昔ハ五十町を用ゐ道規の町となし
里　一里とす唐路ハ六丁を一里とゐ　六里ゐ捨里
　　九万里但唐路ゐ和路面一万五千里也　小里捨町
地周　是大塊の一周ゐ
　　二万八千里ゐ但東西の數也於南北
地徑　三千里の有延故為鶏卵

地度　昔四十三里余今四十一里半六町ゐ
　　各和路ゐ天地共ニ三百六十度を用ゐ
右地周地徑地度の二條無譬の言ゐゐども。古法ゐ
存ぜるゐ故ふ是ふ贅す

見盤大成

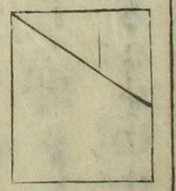
是他流ふ秘する所の一名目ゐ。然ども此法術毎ふ備ハ
ゐう。何ぞ秘訣といふべきゐんや。量地指南前篇中巻下
巻毎術を見て考ふべし

盤切用法

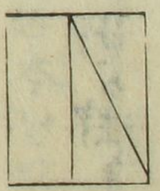
盤切の法剳盤法のごとくして總て盤面を約やく量る法ゐ
古法ふ山谷剳盤平町剳盤二方ゐ。先山谷の術をつとむべ
假令ば平町ふて求る丈數百丈ふ後ふ見込の五を割ゐる
ごとし。割合せゐごとくハ留ゐより百丈量ゐ。残る分を切捨

三を量るなり是山谷剳盤の法又平町筋違等我勤るとき開場ゟ至つて見通ゟ聞るとき也盤の面の角を見通をゝも成難し其時ハ盤の向の端條會になずして向ゟ口出来る故手前より真矩を取て盤を剳て條會を作て量るべし是を平町剳盤といふ

山谷剳盤

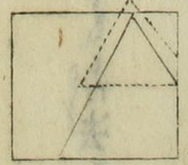


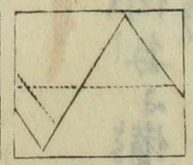
平町剳盤



盤縱用法

盤縱といふハ遠境累隔なる業を勤て盤一面ゟ操し足ざる時外の盤を併せ縱て用をふるふ前篇ゟ予ゞ所謂併盤といふ是なり前條ゟ述る所の剳盤法又此條ゟ五処の併盤法共に

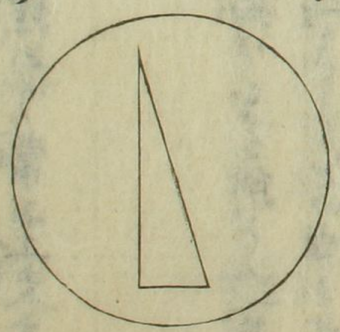




前篇ゟ委ゝ出たるとゝ雖ゟ爰に別傳の條目ゟ秘訣なるを記分故ゟ贅言を述て學者の問を塞ぐ

不拘器物

器物ゟ不拘とハ町見術の諸器物有合ざるとゝハ何ゟかゞらず外面平なる物を用て見盤定木のごとくし其用をなすといふてゝ可なり或ハ定木あつく見盤ゟるゝ時を膳盆の類あても用べし但圖のごとく其中ゟて見込見通をして墨を引とゝハ盤面ゟ其形出来するなり或ハ盤あけて定木なき時ハ糸と針とを用べし或ハ忍等を求るとゝ器物ゟ拘る時ハ萬物障となつてゞ求がたし亦器物を放る意ある時ハ其用全からず其



地ふるしある萬物を即道具に用るの理あり。常み工夫すべし。是ぐ爲ぶ牧用器ぐのり

寸尺之用

寸尺の用とふハ。大凡寸尺ハ規矩術の拘りざる所とい(共又用る所なり。今茲ぬ〳〵ハ寸尺を用ゐるぐきぐをいふ也其故ハ一本術用法ぶ云く。二尺を五すれ。種の口を四倍するとふなり。意ハ二尺を五すれぐ方尺二尺を五すの長さこ心得ぐきぬり。種の口を四倍すとハ。渾発ぢて種を爽ごなりて方尺も。渾発も倶ぶ同すべき口を四倍ふすべぐとぬり。是ぢて方尺を五すとなりたる時。種を爽ごる口二分あべし。是を八分の口ぶ作ゐ。二尺を計るこ。理の當然なり。但まぐ〳〵ぢて傳法也。門弟子をして愚ざるこのおぐ〳〵尤渾発の口をひろくなりて量ゐば量ゐやすさ故ぶかのぐ〳〵縮るなり。其侭ぶ二分の小さ口ぬて長き方尺二尺を量ゐば厘毛に至て治定の分らざるふ依てなり

已尺之用

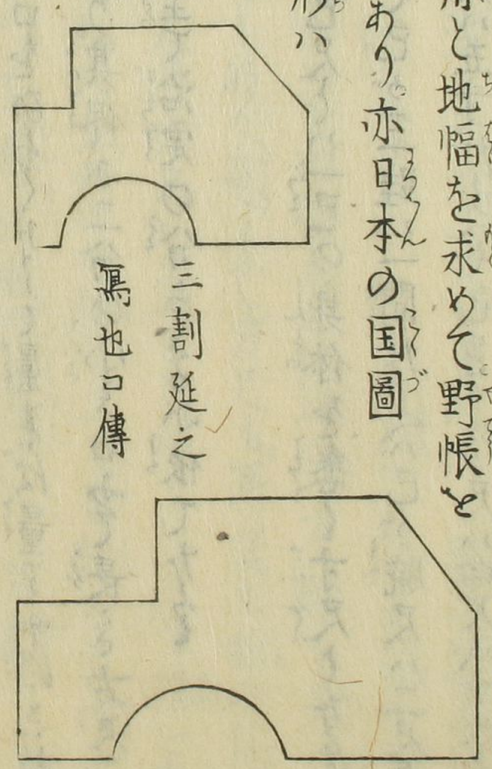
已尺の用とハまづ已尺とハ一已の身体を悉く寸尺となすことなり。意ハなくだ已ぐ二眭ハ一間なくバ已ぐ腕尺ハ二尺五寸なくだ已ゐぐ指尺ハ五寸。なくぐ已ゐぐ跨尺ハ四尺八すなくハ已ゐぐ一尋ハ五尺二寸等。兼て誌置をいふ。其外空眼先知乃類をいふなり。而后作法のぐ〳〵。竪木をなして。其葉を発行すべし。是一本術大要至極の全法なり

圖寫屈伸之用

圖寫屈伸の用といふハ。古傳云分間の圖を屈伸するこゐハず

尺を用るなり。角矩と意順の矩を用るなり。蓋至極の角矩の秘傳ありて。或ハ三分一。或ハ四分一。亦ハ何割等増減ハ寸尺ニ拘ずして渾発をもつて働き。時宜ニよるべし。口傳云云

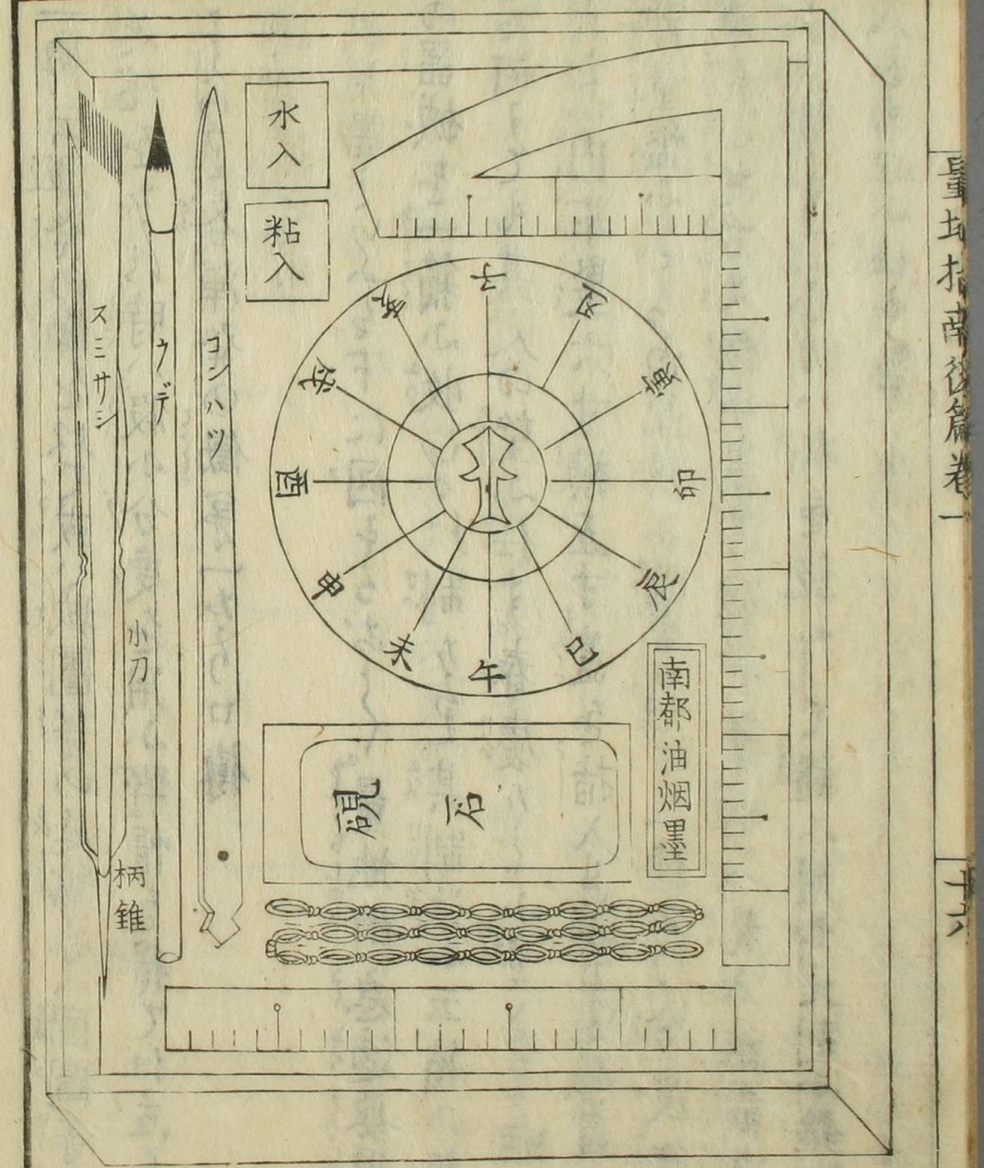
又或傳云国圖城圖等を延縮するニハ假ニ紙の方眼を用ひ分度を以て。方角と地幅を求めて野帳を仕立て寫取ることあり。亦日本の国圖等の矩ニ合ざる形ハ假ニ歩割を用ひてうつすことあり。事ニよりて。そのく口傳あり



一傳云渾発の働を以て。或ハ城圖等の延縮亦ハ国圖等の延縮をなす時ハ。假ニ分度を用ニ野帳を得て仕立ることなり。各渾発の働第一なり口傳

收用器之用

收用器といふ。下に図するごとく。量地術急速要用の器械を一箱ニ收もる仕制をなす。其制法ニ云。箱の板も何ても其人の望ニ任す。春慶などニ塗てよし。大さハ内矩竪六寸横五寸。蓋を指入ふたとする也。蓋ハ即量盤ふたもの。此内ニ收る品。十二種あり。分度矩渾発小丸方尺横手墨笥硯墨筆水入粘入紙裁の小刀等なり。小刀ハ柄を入るも心ニ任すなり。



舊器之號

○貨度轆輪　十六方位なり摸寫の器なりとふ
○貨彈覽天　天尺を量る器なりとふ
○圓盤　同上其用不辨
○星刻　星上圭も名くとふ
○以寸多羅比　舩中の器用も其法知べし
○復寫　摸寫の器
○羅宇坐　十六方位の磁針なり
○漏墨　新制の墨笹よ均しきを
○意順矩　摸圓の器とふ
○方圖器　同上
○星尺　天尺を量る器なり

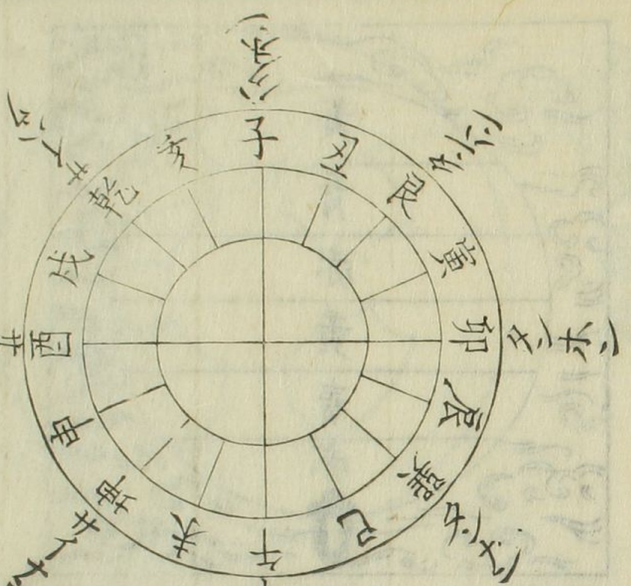
○日影

日影を量るの器なり

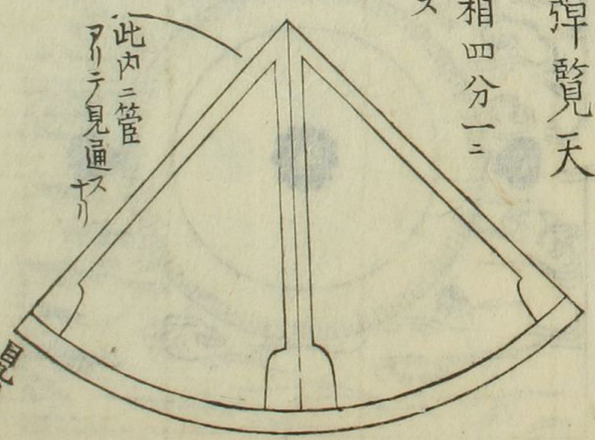
右十二種ハ。粗予が見聞する処なり。其余の品。阿須多羅以与加呂士恵牟須加当太。加路堺。渾発寸天経。天縄標木なと云ものあり。其制法と不辨故ふ圖ゼ。又羅経方針指北なと云。古ふ所謂羅字坐とそれにおく。吾邦當時用る処の磁針ふ同じ。抑此術吾邦流布の始粗此旧器物を用ること有と云ども。異邦の人の其便利と尽さずでくることわさず。是ゟ因てたれより其器物廃ゼて。吾邦今の量地者流今に於てハ旧器の号そこゟ知者なし。此故ふ初学の者往々ふ其器名を聞傳て怪と思ことをいんや。其疑惑と散じ。其用法の失セことを知ゑめん為に爰ふ図ふ示す

右の器械其名ゟ〳〵いくそを。當時ゟ〳〵を用ひず

貨度轤輪

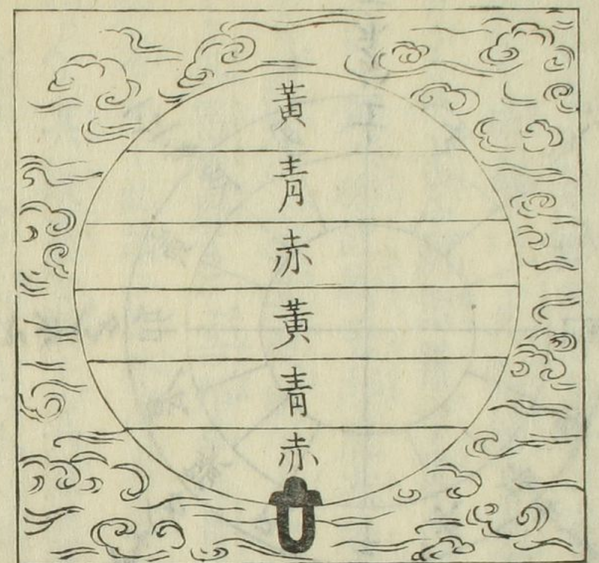


貨彈覧天

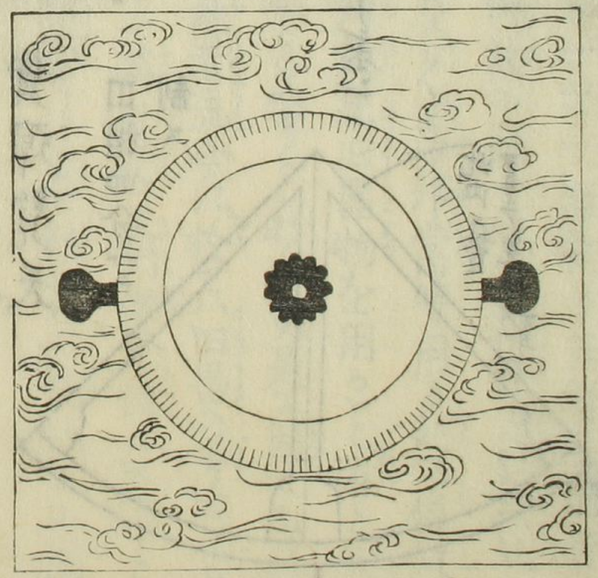


四相四分一ニ制ス

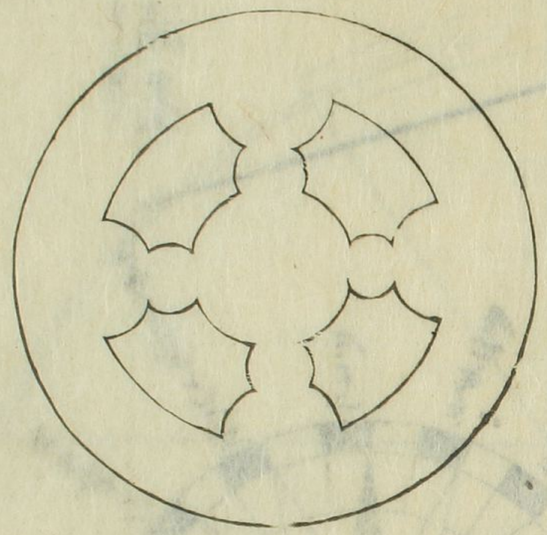
圓盤（ゑん）



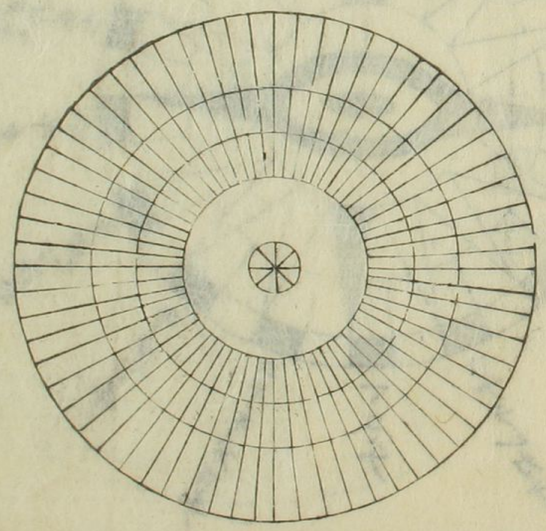
星刻（せいこく）

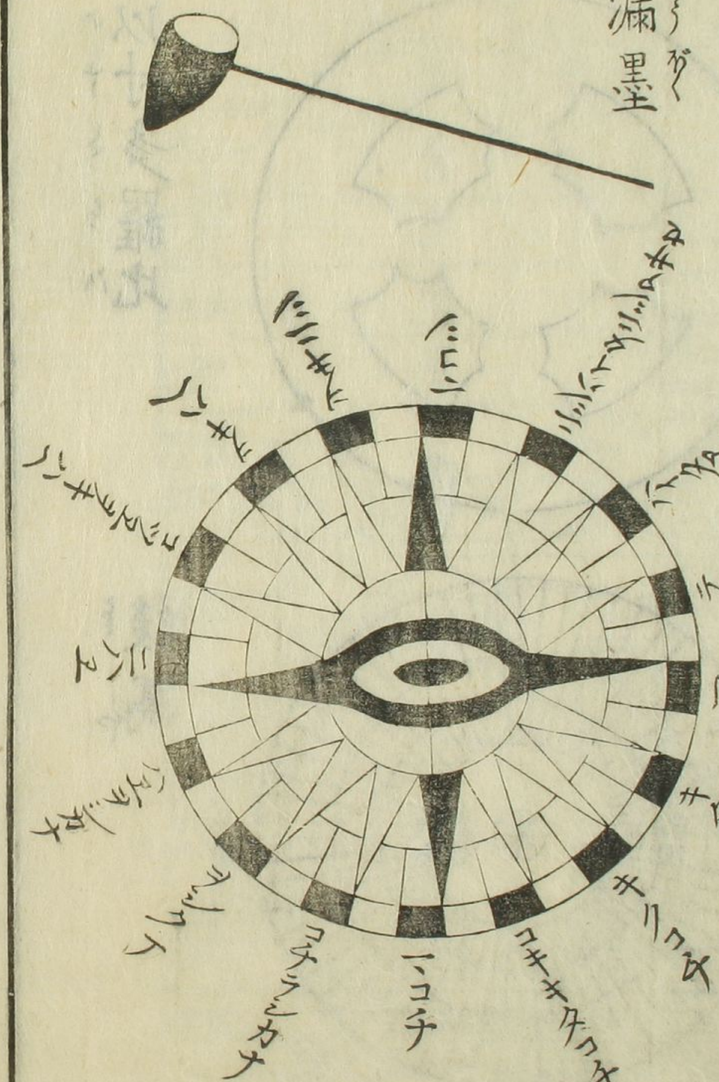


以寸多羅比（いすんたらひ）



後寫（うつし）

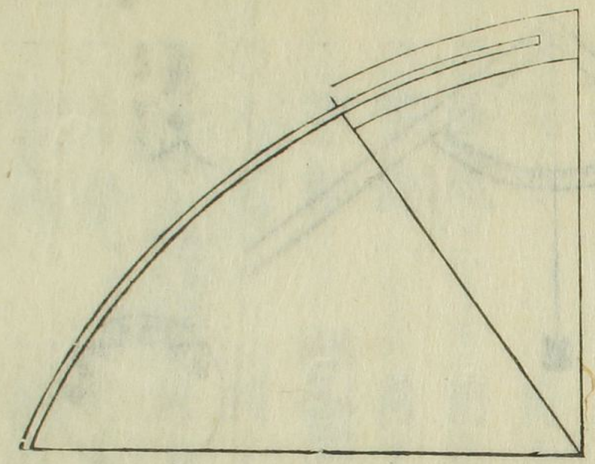




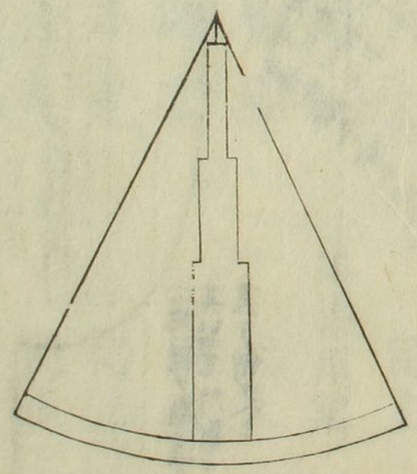
漏墨（ろうぼく）

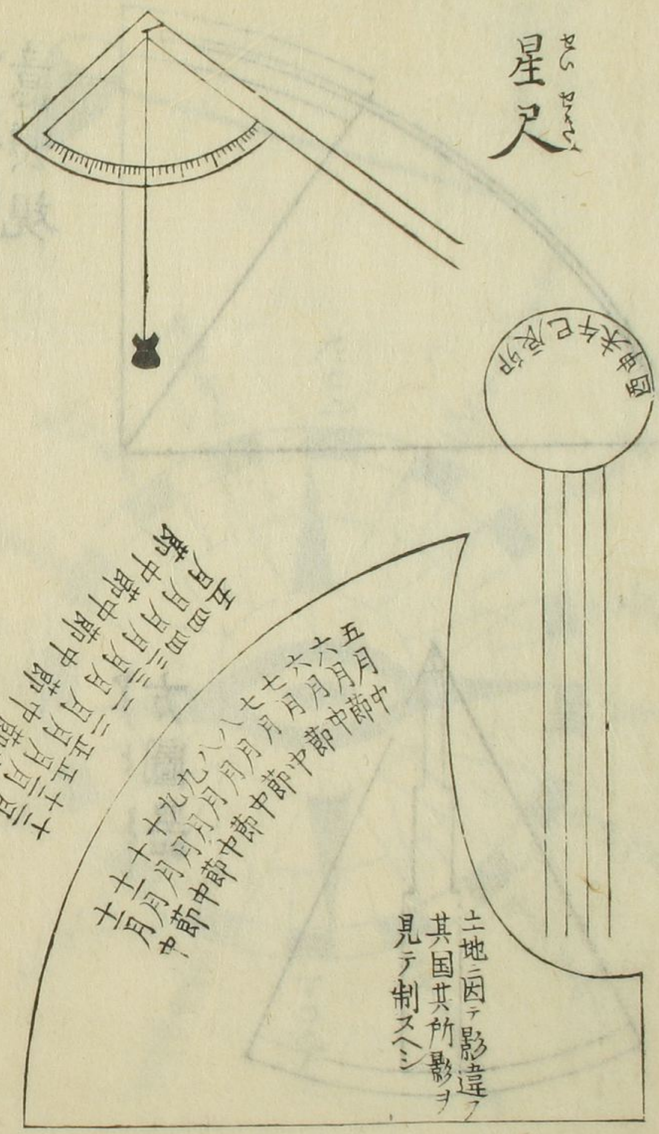
羅宇坐（らうざ）

意順規（いじゅんき）



方圖器（ほうとき）

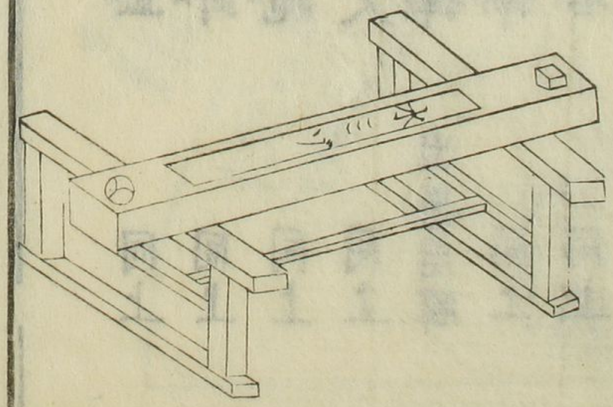




新器之號

- ○渾發　出前編又器用解
- ○釣玉　同上
- ○定木　同上
- ○錐繩　同上
- ○標檄　同上
- ○管棹　出器用解
- ○元器　同上
- ○忍磁石　五寸器ノ隠銘ノ云
- ○基金　中九寸　同上
- ○分度矩　同上
- ○圖馮器　同上
- ○見盤　同上
- ○垂針　同上
- ○間繩　同上
- ○和久　同上
- ○間棹　出器用解
- ○輪棹　同上
- ○磁石　同上
- ○小丸　同上
- ○大丸　円盤ノ形　同上
- ○虎法器　方四器ノ形　同上
- ○隨川器　同上

○方尺　並試定規　同上
○火斜　出極傳解
○度數　同上
○收用器　此章出前件
○折紙　同上
○湊渾発　出極傳解
○遠里矩　同上
○水平　出于此章



二尺より二尺五寸を吉とす。委ハ圖を見て知るべし

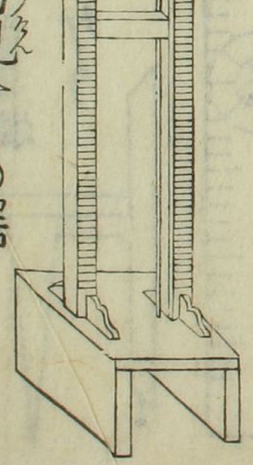
○水準　出于此章

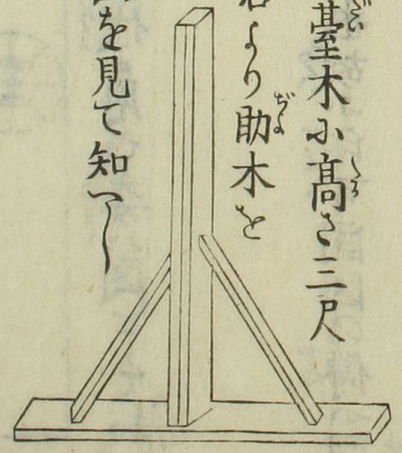
水準の制長四尺横五寸厚さ四寸の墓木ふ高さ二尺方三寸の標木を立る。尤此標木を左右より助木を施してかすがひ斜邪なきやうあるべし

扨標木に魚系をなしる。委くハ圖を見て知るべし

○櫓　出于此章

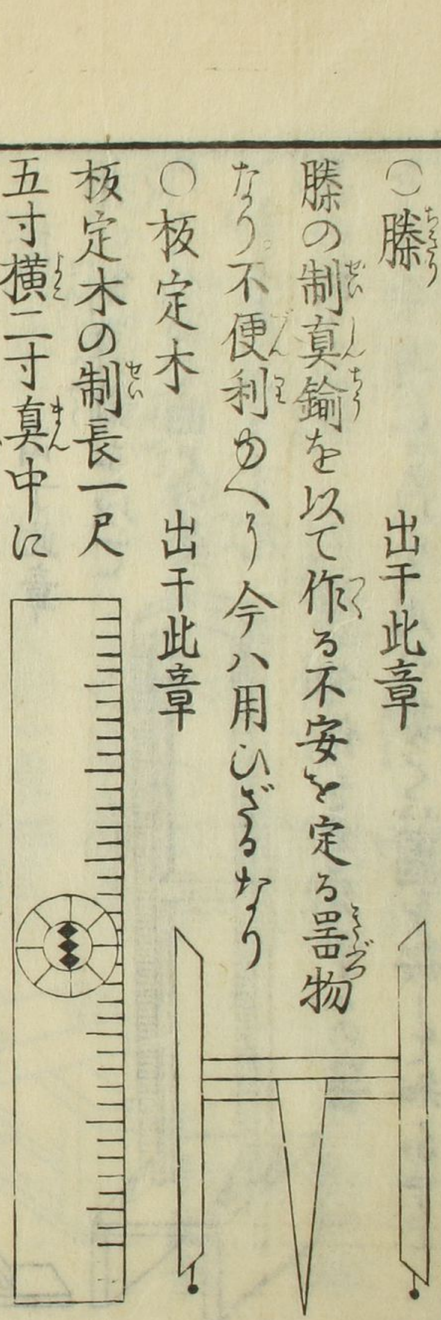
櫓の制真鍮を以て作る左右ふ曲尺の星と罫る高さ五寸元器の桁上ふ載て高程の句倍を考見するの器なり。今專にこれを用ひ。委くハ圖を按して知るべし





○縢　出干此章

縢の制真鍮を以て作る不安を定る器物なり不便利なり今ハ用ひざるなり



○板定木　出干此章

板定木の制長一尺五寸横二寸真中に小丸を彫入る。元器の代よ用ゆ。委ハ図をそ知べ

○種竿

○相圖憒

右種竿相図憒二器ハ。国図の要用也。故ふ印可国図の傳ふ図を

量地指南後篇巻之一終